

討 議

(25) エス пейによる雨水流出算定法とその活用上の問題とその考察

(26) 下水道整備計画に関するシステム論的研究 IX

— とくに計画人口の決定について —

(27) 下水道整備計画に関するシステム論的研究 X

— とくに水環境汚染防止から利水へのシステムズ・アプローチ —

国立公害研究所 内 藤 正 明

(25) について

雨水流出の問題に関しては全くの門外漢であるため、内容については何らのコメントが出来ないのが残念ですが、もし御許し頂けるなら、技術内容に関係のない一般的な表現上のことで一言。それは表現の巧拙のことではないが、論旨の流れが（特に technical term を完全に理解していない半素人にも）自然にたどれるような記述を心掛けていただけたら、本研究成果の価値も一層評価し易かったのではないかという感想であります。多言多謝。

(26) について

将来予測の不確定性を考慮して最適設計規模（又は増設幅）を決定することを検討したものは Rndd, Robertson, Bouthouex らによるものはいくつか散見される。しかしこれらは将来人口予測の確率密度分布を簡単な形に仮定しているところに一つの問題があるのであろうが、本研究はこの分布形に一般形を与えて、これを厳密に解いている点に一つの成果が認められよう。ただし、それより計画上の理念を明らかにした2種の評価関数を明確に設定し、それぞれの場合の解の意味と、互いの関係を計画論の立場から検討したものは寡聞にしてまだ他に例を見ないのでこの部分に本研究の層の評価が与えられるであろう。なお、上記の外国の研究例では、増設を段階的に Δt 間隔でおこなうことを検討したものが多いが、（これは下水道建設などで重要と思われるが）本報の手法はそれらと本質的に異なるものですか、それともそのままの形で適用され则认为てよいでしょうか。またそのような段階的増設の場合には Δt 経った時点で既に予測の当否は分っているので、この予測の誤差を次のステップの計画に与件として組み込んでいく Adaptive な手順が考えられてもよいのではないかと思います。これについて御考えがあれば御教示下さい。

(27) について

本報は著者らが地域水環境計画という大きなテーマの下に、長期に亘り精力的に実施された多くの研究、サブテーマ、それぞれの位置づけ、及び全体の理念を紹介されたものである。個々の手法についての記述はない（それが本報の目的ではない）ので、それについてのコメントは出来ないが、本報の主旨は総論部分で述べられている計画理念の主張にあらう。これは従来のあり方に反省を与えるものとして既に当分野で相当の評価をうけているので、改めて言を加えない。なお、各論部分は（別のところでこれらに接する機会を持った者として）少くとも我国のこの分野でこれまで余り見られなかった数理手法を十分に活用したものであるが、この種の研究例が他に余り見られなかったし、また今でも見られないことにむしろ奇異な感を持つのは私だけであらうか。